



会議レポート

オブジェクト指向シンポジウム 2003

1. はじめに

情報処理学会ソフトウェア工学研究会では、1995年から、オブジェクト指向シンポジウムを開催し、産学の枠を超えた幅広い議論を展開してきた。この活動を継続発展させ、ソフトウェア工学の新たな方向を見据えることを目的として2003年8月19日から22日まで、早稲田大学においてオブジェクト指向シンポジウム2003（以下OO2003と略記する）を開催した。

本稿では、シンポジウムの概要を報告する。

2. 準備と運営

前回のオブジェクト指向シンポジウム（OO2002）では、既存の研究成果の普及や、その導入の支援、さらに新しい視点を与えるために、重要な技術やその応用を入門から専門的な議論までのを絞って取り扱うセッションをいくつか企画し、好評であった。OO2003ではこの成功を受けて、論文セッションに加えて、以下の企画セッションを計画した。

- オブジェクト指向の実践
- パターン
- ポストオブジェクト技術
- Web サービス
- 組み込みソフトウェア
- マルチベンダ相互運用
- XP
- デモンストレーション

いずれの企画も、プログラム委員会で運営責任者を選任・依頼し、企画の詳細の決定や運営は責任者に一任する形式をとった。実行・プログラム委員長を始めシンポジウム運営スタッフすべてがボランティアという状況に



図-1 B.Meyer による特別チュートリアルの風景

おいては、責任者の人選が、企画の良否を決定するといっても過言ではない形式である。幸い、どの責任者も精力的に企画に取り組んでいただいたおかげで、企画セッションはすべて、参加者には好評だったようである。

付け加えるべきこととして、一昨年のOOシンポジウム（OO2001）から導入された、早期登録割引制度を今年も実施した。当日参加の数を減らし、受付業務の混乱を緩和するという目的どおり機能したと考える。参加者総数234名のうち、73%が事前登録を行い、事前登録者の73%が割引制度を利用した。

また、近代科学社から論文集¹⁾を刊行し、基調講演論文、一般論文、企画セッション概要を掲載した。一般書店等での販売によるシンポジウムの成果の普及と、投稿者の動機向上を図るためである。

3. プログラム

シンポジウムプログラムは昨年通りの以下の3本柱と、ソフトウェア工学研究会創立25周年を記念したセッションとで構成した。

- 一般論文
- 上記企画セッション
- 招待講演

シンポジウムを、一般の概念通り、最新の研究成果やその適用を公開する場であると考え、一般論文の多数の投稿はその成否を決定するものである。OO2003では34件と例年と比較して多くの投稿があった。1件あたりプログラム委員3名が査読を行い、19編を8ページのフルペーパー、4編を4ページのショートペーパーとして採択した。一般論文セッションと研究論文・経験報告の別は以下に示す通りである。

- Web アプリケーション（研究論文2件、経験報告1件）
- Web サービス（研究論文1件、経験報告2件）
- 開発環境とその基礎技術（研究論文3件）
- テクニカルソフトウェアプロセス（経験報告3件）



図-2 パネル討論
「わが国のソフトウェア工学・産業の将来へ」の風景

- 計測（研究論文 2 件）
- ポストオブジェクト技術（研究論文 3 件）
- 実験的アプローチとそのモデル（研究論文 2 件，経験報告 1 件）
- 分散処理とどこでも計算（研究論文 3 件）

ポストオブジェクト指向等の新しい研究や，形式手法等の基礎研究から，応用技術に関連する要求獲得や見積もり技術，また，MDA（Model Driven Architecture）や Web サービス等の新しい開発形態の話題まで，オブジェクト指向をキーワードに，今日のソフトウェア工学を構成する幅広い分野の論文を採録することができた。

企画セッションでは，上述の目的を達成するために，チュートリアル・論文発表・パネルがバランスよく配されていた。チュートリアルとして行われた“要求獲得と合意形成のためのパターンランゲージ入門”には，講師として建築家の中埜氏を迎えた。建築設計というソフトウェア開発とは異なった分野でのパターン言語を事例を交えてご紹介いただいた点で，興味を引くものであった。パネル討論“形式仕様記述言語としてのプログラミング言語—XP を例にして”では，XP の経験者と形式手法の研究者が，各々の立場からの議論を展開され，会場からの質疑も活発であった。質疑の内容から，一見しただけでは正反対に見える形式的アプローチとアジャイルプロセス，さらにその融合に対して，ソフトウェア開発現場から寄せる期待の高さを見てとれた。

招待講演としては，チューリッヒ工科大学（ETH Zurich）の Bertrand Meyer 教授による“Trusted Component”と題する研究成果の発表と，経済産業省の嶋田隆氏による“ソフトウェア工学の推進について”と題する我が国の取り組みについての紹介をプログラムに取り入れた。前者はコンポーネントとしてのオブジェクトの形式記述に関連するものであり，オブジェクト指向技術の実践が一般的なものとなってきた近年の状況において，基本に立ち返ることの重要性を認識できるもの

であった。後者は同省で計画段階である，ソフトウェアエンジニアリングセンターの紹介を交えた，ソフトウェア工学の実践的研究開発のビジョンに関するものである。講演に引き続き，パネル討論を行い，パネリストと会場の参加者を交えて討議した。

ソフトウェア工学研究会創立記念として，“ソフトウェア工学のパイオニア：黎明期のソフトウェア開発現場における挑戦”と“ソフトウェア工学研究会の 25 年を振り返って”と題する 2 つのセッションを企画した。前者は以下の 3 件発表からなり，過去の事例から学び，将来を展望するものであった。

過去の事例から学び，将来を展望するものであった。

- 我が国での大規模オンラインシステム開発の黎明—東京オリンピックにおける新技術の挑戦—
- 失敗させないソフトウェア工学
- プレ・オブジェクト指向からポストオブジェクト指向へ
後者では，過去 25 年の研究の歴史を振り返り，現在の研究の源流を探った。どちらも，懐古趣味に陥ることなく，解決された問題とそのための技術を振り返ることで，未解決な問題に対する新技術の在り方を問う議論が展開され，現状の問題認識を新たにさせる内容であった。

4. おわりに

OO2003 の概要を述べた。シンポジウム最終日に，研究論文と経験報告各 1 編合計の 2 編を最優秀論文として表彰した。選考においては，論文賞選考委員会をプログラム委員を中心に組織し，発表の良否を含めて，内容を吟味した。委員の投票により，得票多数論文を候補として委員会で議論し，選考した。受賞論文は以下のとおりである。

研究論文：石尾隆他，“プログラムスライスを用いたアスペクト指向プログラムのデバッグ支援環境”（大阪大学大学院情報科学研究科）。

経験報告：竹村司，“UML クラス図からのワークロードの見積もりとスケジュール作成”（日本 IBM）。

最後に，シンポジウムを企画・実行するにあたって，尽力いただいた関係各位に感謝したい。

参考文献

- 1) 野呂，田村，張編著：オブジェクト指向最前線 2003，情報処理学会 OO2003 シンポジウム，近代科学社（2003）。

（青山幹雄／南山大学，田村直樹／三菱電機，野呂昌満／南山大学）